平和憲法を広める狛江連絡会
ニュースレター
第 15 号 2005.9.13

こまえ 平和フェスタ

2005年7月24日(土) エコルマホール

650名の参加者で 会場埋まる

「平和憲法を広める狛江連絡会」が中心となり、昨年より取り組んできた「平和フェスタ2005」が650ほどの参加者を得て成功のうちに幕を閉じました。

昨年暮れには、狛江市との共催が決まり、今年4月からは、後援してくださった狛江市音楽連盟関係の方や、朗読劇に出演してくださった「朗読と民話の会」の方々と共に実行委員会を組んで準備を進めてまいりました。

心配していた来場者も、開演時には、ほぼ座席を埋めるほどに集まり、マンドリーノTAMAによる美しいマンドリンの響きで開幕しました。若さのはじける2中の生徒さんの合唱、平和の願いを込めた調布狛江合唱団の合唱、2月より練習を積み重ねた朗読劇「この子たちの夏」、公募で集まった方たちによる平和フェスタ合唱団の手話コーラス。盛りだくさんな内容になりましたが、途中で退席される方もほとんどなく戦後60年を迎えて改めて平和を願う熱い想いに会場が包まれました。市議会議長さんはじめ、市議会の様々な党派の方々が参加してくださったことも大きな意義があると思います。

参加くださった皆様、出演してくださった皆様、実行委員として、当日のスタッフとして協力してくださった皆様に心から御礼申し上げます。

このフェスタが、わずかでも平和の種まきの役割を果たし、「暴力、武力、戦争によらない平和を」の思いが広がっていくことを願っています。さらに私たちは、今後もこの思いを広げる活動を模索していきたいと思っています。今後ともご支援よろしくお願い申し上げます。

当日のプログラム、アンケート出演者の感想を掲載させていただき、ご報告に代えさせていただきます。

(小俣眞智子記)

＜朗読劇出演者の方のご感想＞

朗読劇「この子たちの夏」に参加して

宮崎三重子

戦後60年の今年の夏、私は"こまえ平和フェスタ"の中の朗読劇「この子たちの夏」の発表の仲間に加えて頂きました。今迄、有楽町の朝日ホールの客席からしか接することのできなかったこの素晴らしい作品に参加でき、本当に幸せだったと心から思います。勿論、素人の集まりですから、とてもプロの方々には及びませんが、読み込んでゆくうちに、ぐいぐい胸に迫るものがあり、原爆について、戦争について改めて深く考えさせられました。

殊に狛江高校の生徒さんのあの澄んだ高い声に接する毎に胸がいっぱいになって、涙が出ました。若い人たちが再びむごい目に遭うことのないよう祈らずにはいられません。

練習のメンバーも日を重ねるに従い、お互いに打ちとけ、最後の反省会では離れ難い思いでした。くちなしの匂う宵、バラの香の流れる夜、あちこちの集会所で練習を重ねた日々のことが今は懐かしく思い出されます。

最後に、ご指導くださった先生方、側面から支えてくださった実行委の方々、毎回、暖かく、練習終了まで見守ってくださった市の協働課の方に心からお礼申し上げます。

朗読劇「この子たちの夏」に出演して

荻野　惇子

私は、人前で話をしたりするのが苦手で、最初は、朗読劇に参加したことに戸惑いがありました。全く自信が無いので、小さな声で、やっと読んでいるという有様で、指摘されることがすぐに直せなくて途方にくれることも度々でした。読み込んでいくうちに、これを書いたお母さんの想いはどんなだったのだろう、文章には表し切れないくやしさや悲しさを共有することができるのだろうか、想いを伝えられるように読めるのだろうか、など迷いながら練習しました。他の人のパートを聞いていると涙ぐんでしました。特に、辻本不二夫の手記は、素直な少年の気持ちが伝わってきて、何度聞いても、いつも泣かされました。日頃の生活の中では、何かに打ち込んで頑張るなどと言うことが少なくなっていましたから、これほど真剣に取り組んだことは、久しぶりでした。

終ってみれば、このような機会に出逢えて充実感を味わうことができてうれしく思っています。

ヒロシマの確かな心

野田　定男

こまえ平和フェスタ2005は、成功のうちに終りました。出演者の皆さんは元より、観客の皆さんも一様に「よかった・・・」「素晴らしい催しだった」と口々に話され、「狛江でもやれば出来るんだ」の達成感ひとしおでした。

残念なことに私自身は、プログラムを全部見ることは出来ませんでしたが、狛江市平和都市宣言の宣誓、実行委員長、市長、議長さん、それぞれのお話に参会者は、共感の大きな拍手で応え（このすばらしい一体感・充実感はなんだろうー）改めて市民と市との協働化の大切さが確認されました。

そして、当たり前のように「来年もまた平和フェスタでお会いしましょう」と皆さんの声として出てきたのです。

プ　ロ　グ　ラ　ム

アンケートより

＊１００名ほどの方から温かいご感想を頂きましたので、その一部を掲載いたします。

《演目への感想は？》

・いろいろなグループのパフォーマンスがあって、目から耳から訴えかけられるものがありました。若い戦争を知らない子ども達にも見せてあげたい。

・すべて涙があふれて・・・素晴らしいフェスタでした。無料でおきかせいただき感謝です。

・狛江２中の合唱すばらしかったです。少ない人数であれだけ美しい合唱を作り上げている皆さんに心からのエールを送ります。

・朗読劇初めて見ました。すごいです。手話の歌も・・・夏こそ平和を考える時です。

・若い方が中心になって活躍されている点が素晴らしい。市民と行政が協力して催しを行った点も、さすが狛江と敬服する。音楽都市狛江、芸術都市狛江が着々と実っていると実感させられた市民皆様の活躍ぶりでした。出演の皆様、会のために準備してくださった皆様に心よりお礼申し上げます。有難うございました。（狛江をお手本に調布も変えていきます。）

・途中からの参加でしたが、この子たちの夏の朗読が聴けて大変良かったです。民藝の方の話にもありましたが、毎年続けてください。一人でも多くの人に聞いていただき、憲法九条がいかに大切であるか気づいてほしいと思います。

・市民一人一人普通の格好をして平和を叫んでいるのがとても素晴らしい。そうすることにより僕ら一市民も勇気づけら

れるのだ。こんなにも感動するのだ。こういうことができる狛江はすばらしいところだと思います。悪い点は、なぜこんなにも若者が少ないのか・・・もっと集めましょう。

・「その夏をおしえて」素晴らしい合唱をありがとうございました。涙が止まりませんでした。手話が加わると一層心を打ちますね。私も今、手話勉強中です。

・市民に公募して、朗読・合唱など多彩な取り組みをしたことがとても良かったと思います。この取り組みをもっともっと多くの人々に広げることができる種がたくさんできたのではないかと思います。

・日本国憲法を改定しようと言う動きの中、狛江平和都市宣言の中に、第九条の「戦争の放棄、交戦権の否認」を確認できたことは良かった。狛江第２中学校の歌は、「ラブアンドピース」の気持ちが良く伝わってきた。「この子たちの夏」６０年、さらにこれからもこの声なき声を埋もれさせてはならない。

・初めて狛江の平和都市宣言を読ませていただき、胸の熱くなる思いがしました。若い人からお年を召した人まで、みんなが心を一つにして平和を願う集いであったと思います。

・多くの出演者、スタッフが心一つにして取り組まれたいい集いでした。観客の方も熱心に聴いていらっしゃるのが伝わりました。

・朗読劇をはじめて見ました。言葉だけで様々な情景が思い浮かび涙が出ました。

・30000発の数字を挙げた実行委員長の挨拶．そして7000万（埋められている地雷の数）最も安い兵器。「この子たちの夏」は初めて見ましたが、やはりすごい！バイオリン、ピアノも旋律もすごく良かった。舞台のバックの映写も言い！

合唱は、素晴らしいですね。

《平和へのメッセージをどうぞ！》

・戦後５０周年の年、「人間魚雷」の存在を知ったとき、もう戦争のことは充分知ったと思い込んでいた自分を恥ずかしく思いました。地雷をなくすためのロボット開発は、進んでよいかと思います。

・こうしてここで様々な演目を通じて「平和への祈り」を訴えている時に地球の反対側（今はもう「世界全部を巻き込んで」と言うべき？）では戦争したり、テロを仕掛けたりしていることがとても悲しいです。ベトナム戦争がアメリカ国内の反対で状況が変化してきたように、今の状況もテロなどの恐怖によるものでなく、少しずつでも平和な運動により変化し、平和になることを切に願います。一国ないしは、一部の利益のための戦争がどれだけ多大な人々（幼児、老人、女性たち）に不幸な影響を及ぼすか、単純なことが判らない。また、判っていても目先の利益を優先することに憤りを感じます。

・集団疎開、空襲を経験した世代の者です。子どもや孫やもっと後の人達たちに私の経験したあのような思いを、生活を絶対させたくありません。

九条の会・有明講演会

――7月 30 日有明コロシアムに9500人集う――

大会場に1万人の拍手が鳴り響いて集会が始まった。荘村清志氏の奏でるクラシックギターの静かで澄んだ音色がしばらくの間会場を包んだ後、小森陽一氏、渡辺治氏の司会で会は進行した。昨年６月９人の方々の呼びかけで 1,000 人集まった「九条の会」結成大会から1年目を期しての講演会。この１年間で全国各地に 3,026 の「九条の会」が誕生したとの報告。講演は９人の呼びかけ人の中から６人、澤地さんはビデオで参加された。

三木睦子さん　私は９人の中で最高齢の８８歳だが、私以外も若くはない。しかし９人が９人とも年を忘れて東奔西走した１年だった。古い者たちが戦争の辛さを語らねばと思っている。私は戦時中、防火訓練の隊長で、焼夷弾がばらばら降ってくる中、わが子を抱いて逃げるわけにもいかず、お手伝いさんに「子供を連れてどこかに逃げて！」と言うほかなかった。赤ん坊を抱いて、イラク派遣の夫を見送る母親の姿を見ると涙が出る。世界のどこをも敵にしないで、平和で静かな、芸術の光あふれる日々に生きるため、九条こそ一番守らねばならない大切なもの。その九条が危ないと、血を燃えたぎらせてやっている。

鶴見俊介さん　「草加せんべい九条の会」から九条せんべいをもらった。自分は何ができるかと考える。私の目標は平和をめざしてもうろくすること。理屈は人間の知恵を奪ってしまう。新聞記者たちは明治・大正、様々な理屈をつけて殲滅戦を立派な行為のように飾ってきた。米大統領の、かつての野蛮を超える野蛮な理屈の行き先を見極めたい。明治以来戦争で殺された亡霊も参加する反戦運動を、もうろくを盾に死ぬまで続けたい。

小田実さん　孫文は 1924 年来日した時の演説で「強力な軍事力、技術力を背景に世界を制覇した西洋文明で

ある《覇道》の文明を日本は早々に取り入れ、ロシアと戦争をした。しかしこれからは道徳、仁義を重んじる東洋文明の《王道》を中国と共に作っていこう」と訴えた。しかし日本は覇道に走り続け、大量の命を奪い、失い、敗戦した。王道、即ち平和な文化的な国、この中心にあるのが憲法九条だ。九条は日本だけのものではない。アジアに対する侵略戦争への反省でもある。世界、とりわけアジアの人々から信頼を得るのは平和憲法があってのことだ。

奥平康弘さん

５年間かけた国会の憲法調査会の報告書は内容がスカスカで、占領軍の押し付け論も加憲論も打ち上げ花火に終った。改憲勢力は九条二項に絞ってくるだろう。「九条一項は変わらないから平和主義は残る」という言い訳にごまかされてはならない。二項を欠いた一項はもぬけの殻になってしまう。アメリカとの軍事行動の何の妨げにもならない。九条の一点に絞った改定の動きを阻止するならば、日本の歴史上、画期的なことになるだろう。

司会役の小森さんは奥平さんの話を受けて「なぜ５年もかけてインパクトのない報告書になったかと言えば、われわれ護憲勢力が頑張り、九条を守ろうというたくさんの声を無視するわけにはいかなかったからだ。」と会場の意気を盛り上げた。

大江健三郎さん

昭和20年、米軍上陸の時、沖縄の慶良間諸島では60発あまりの手榴弾が軍から住民に配られ、700人の人が集団自決した。が、そうさせた者は責任を問われただろうか。また 1980 年政府は被爆者に対し、国を上げての戦争であったから、国民が犠牲を被っても、原爆被害も含め「受忍」しなければならないという見解を出した。沖縄、長崎、広島で人々は人間として決して「受忍」できない苦しみを被った。過去だけのことではない。新たに作った有事法制によって思想、良心、信仰の自由の制限を受忍させようとしている。上からおっかぶされる「受忍」という考えは押しつぶさなければならない。米国の詩人がくれた二行の詩を若い人たちに紹介したい。「求めるなら助け（＝変化）は来る。しかし君の知らなかった仕方で」

井上ひさしさん

昭和 20 年の平均寿命は男性 23.4 歳、女性 32.3 歳だった。もとより戦争のためだ。また広島の被爆者の記録の中に、燃える二階から「赤ん坊を投げるから受け取って!!」と叫ぶ母親の声を聞きながらそのまま逃げてしまったことを60 年たった今も悔やみ続けているという文がある。そんな時代が「素晴らしかった、それこそ正しい日本だ」と言う人たちがいる。「平和」という言葉は使われすぎて言葉としての力を失いつつある。「日常」と言い換えてみたい。自分の「日常」を国家や企業に決められてはかなわない。＜軍事施設がない＞＜兵士がいない＞＜戦争を望まない＞の三つの条件が揃って「無防備地域」を宣言した地域に対してはいかなる国も攻め込んではならないということがジュネーブ協定で決められている。この無防備

地域宣言と憲法前文と九条をひっくるめて日本の基本形としたら、私たちの『日常』を守っていける。『俺の運命は俺が決める』という世界的な動きが一つになっていけば・・・。この奇跡に私は人生をかけたい。

６人の講演が終って、参加者全員で九条を読み上げ、渡辺、小森両進行役が今後の行動を呼びかけて集会は終った。

６人の講演者は決して若い方々とは言えない。ステージの演壇にたどり着かれるまでの足取りが気遣われる方もいらした。しかし、「今引き下がっているわけには行かない！」という気迫が、いま現在の憲法の状況への危機感を伴って私たちに迫ってきた。また６人の方々のりりしいとも思える姿は、この一年で日本中に生まれた九条の会、そして今日この大会場を埋めた9500人の人々からもらった力のためかもしれないと思えた。9500人は演壇の人たちの１つ１つの言葉に大きな拍手で応え、この集会でこれからの行動の更なる活力をもらって来年は東京ドームを埋めようではないかという意気込みで各地に散っていくように見えた。

ここ狛江でも10月29日「こまえ九条の会」の発足を目指して、市民の賛同の輪をもっともっと広げながら準備を進めていきたい。

（寺尾安子記）

「九条の会」の新しい訴え

「九条の会」は7月30日、次のような４項目の訴えを発表しました。

◎「九条の会」アピールに賛同し広範な人々が参加する「会」を、全国の市区町村、学区、職場、学校につくり、さらに広げましょう。

◎相互に情報や経験を交流しあうネットワークを広げ、来年、全国的な交流集会の開催を目指しましょう。

◎大小無数の学習会を開き、日本国憲法９条の意義を学び、改憲キャンペーンをはね返しましょう。

◎私たち一人ひとりが、ポスター。ワッペン、署名、意見広告、地元選出の政治家・影響力を持つ人々やマスコミへのハガキ運動など、９条改憲に反対する意思を、様々な形で表明し、大きな世論をつくり出しましょう。

「狛江九条の会」発足集会

10月29日(土) 午後２時～

同封しましたチラシの通り狛江でも「九条の会」の呼びかけに応えて「こまえ九条の会」が発足します。

「平和憲法を広める狛江連絡会」の世話人の者たちが個人の形で発足の準備に当たる事務局を担っています。

同じ思いの方、また、この思いを広げるために　ぜひご参加ください。

「九条の会」アピールへの賛同署名にも　ぜひご協力よろしくお願い致します。

「九条は、アジアに対する日本の反省でもある」（小田実）

日本軍によるアジア各国の性暴力、強制連行、集団虐殺、生体実験等の被害者が日本政府に訴えた戦後補償裁判は８０件に上る。ほとんどは棄却又は控訴中である。その一つである現在控訴中の婁慶海さんの陳述を紹介します。（二〇〇五.八.三一 第２回控訴審）